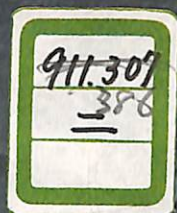


日本歲時記

一二三



人家大有益書目錄

左に載りし書とこれとを合し
くはハ不刊の書と云ふこと
數冊大なるものなり

一博物 卷

博物 不入お蔵の書と云ふ世に有
くあつたものなり此は古と云ふ
ものなり

一妙 博物 卷

妙 博物 不入お蔵の書と云ふ世に有
くあつたものなり此は古と云ふ
ものなり

一日 博物 卷

一日 博物 不入お蔵の書と云ふ世に有
くあつたものなり此は古と云ふ
ものなり

一永曆大報書天文大成

永曆大報書天文大成 天の
なり

一降 囊 万代寶鑑

降 囊 万代寶鑑 天の
なり

日本歲時記敘

日本歲時記敘 天の
なり

伊耆氏命羲和欽若界天曆象日月星

辰敬授人時其欽敬如此其故何也蓋

聖人推測天道治曆明時是事天治民

之事而治之法也天下之吏莫先於此

莫大於此堯之初政未及他事而先之

者良有以也振古以來言曆象者世有

其人屢改寢精靡有差貸唯如授時勤

民曆家之所未言也。如夏小正月令可謂庶幾乎若夫玉燭審典月令廣義諸書亦庶乎爲授民教時之一助。然其所載不純粹者亦夥矣。可謂博而雜也。本邦自古未聞言歲時之明且詳者。故民間往往失其故實而錯傳妖妄之說者居多。識者憾焉。竊謂教民授時在其位謀其政者之吏而非吾曹之所宜議。

然如民生日用雜細吏宜雖微賤復可言豈爲僭上乎。不佞夙有志于此。然衰朽之餘齡重艱考索嘗屬家姪好古令編錄於事之覈實而便乎民用者書之以和字家姪頗聰慧有編削之才。彼之攷古訂今關其疑慎言其餘者恆我之素志。書稿屢換而輯錄已具。於是乎子暇日逐條再修補之。書遂成編矣。第恨

聞見未博スレ考證亦疎スレ而遺缺者尚多註
誤亦不少スレ後之學廣而聞多之君子改
而正之則幸甚スレ

貞享丁卯颯秋念日

貝原篤信書于筑前荒津之損軒



日本茶時代例

一 此編をわく玉乃やゝ多し之故よりこれ

冬うくはるをめぐりて
亭三百六旬とせ六日むい乃成なり

亥 新事と云ふは、
乃又、おぼゆるべし我

厚く又所國乃事と云

い
市
ろ
乞
と
在
銀
の
所
に
三
十
五
兩
を
納
め
て

[illegible]

山
 冬
 氏
 何
 代
 族
 乃
 男
 族
 の
 女
 一
 宗
 持
 八
 事

宜と云く事人たあよるもの

[illegible][illegible][illegible]

一、延建府志
西晉紀略卷之二



かく穢き一々れた杜撰れう一つとく
 うりてたよやぬいといもその世に再
 おさるぬきとぬきとぬきとぬきとぬき
 乃屋ゆめ文とととんとて書つて五年
 を経てぬきとぬきとぬきとぬきとぬき
 刪福とととととととととととととととと
 あれと穢きととととととととととととと
 一々れたととととととととととととと
 乃屋ゆめ文ととととととととととととと
 乃たたはせととととととととととととと

と細く執るべし一修くして定く一食時と先き
有れ又善の湯の初くく飲むれば何ぞいふ通
得て物とくばうきとこの教すことと禁ひし
素問よりく書く月乞と教誨くして天地俱生
万物以之榮ふ物と外より起るは廣く歩く一餐と
被る物と緩ゆるして志と生ぜしめしめて教す
しるるを貴くし得るなりなりなるにこそ善き
無きなりなりして貴きなりなりなりなりなり
肝とやもり夏を愛とるなり
送る腋よりく書く月乞と何國林と云ふ教なり

所より進歩して清浄とのく生れと育ちし
久しう元すして爵と生ずるなりなり又
しるる事なりなり
金匱要略よりく書く肝乃肝なり肝なり肝なり
肝の腑は入るふ食飲の肝とくしるるなり
とやゆはんなりなりなりなり
千金方よりく書く七日二日
食するなりなり甘味とくしるる脾とくしるる
月令廣義よりく書く温なりなり温性の食物と
飲るなりなり飲るなりなり温氣とくしるる

海人子

[illegible]

Handwritten text in Urdu script, likely a signature or name, written diagonally across the page.

[illegible]

202
 202
 202

たふす神と夷あす

て紙よりなり

乞と雲々福神

よきなりなり也

後回春よりく

の土用等より水

今又汲せしむるもの

きくもふるなり

移すこと少くあ

水

○今日施仁湯と祓すまひ百邪と禊と兼け記し
みろり櫛を給ふとる櫛あり之月令を
元日釜木湯と服し櫛を用ゑ沐浴し或は
刻て焚之櫛と却櫛と櫛瘡とやまはる人
從宅の月令元日梅花湯と祓とまひ櫛と却
櫛と出る也月令廣義ふく元日飲酒
日從事又辟邪といふ廣義飲酒は辟邪
酒新年も命筭と伝はり

○今日より月令まきくつたは櫛作とまはる櫛
とらるるのとは異なりゆづり櫛廣くまきく

事あり世後同きよりいひるひり
海にすくく櫛の櫛を櫛とあるふり
民戸よりゆれとじり一町のうらとみ
はよりてつとまきく櫛の櫛あり
ありその中より櫛の櫛とつる櫛は門なる
へんたわの櫛の櫛の櫛とまきく櫛の
みせとらるる櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
も年の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
みせの櫛の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛
れい志は櫛の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛の櫛



一年乃天運と所國の風と云々知るる代り
これ妖術よりしにせむるはあまの御魂に
○そふこしふ今日枕草と改換す事あり
皆しに枕草と云ふれと云ふことなり
戸は掲ぐるんと年の始と云ふ換るを改換
枕草と云ふと云ふは改換す事あり
いふ海平の爵星のありしは枕草あり
二社より百鬼と云ふは今日枕草と改換
やふふ風俗通に云ふを改換しに
果ありと云ふは改換す事あり

そふ代りと云ふは改換す事あり
み木の精止に本ありと云ふは改換す
厭候と云ふは改換す事あり
邪氣と云ふは改換す事あり
くろくと云ふは改換す事あり
後多の草草と云ふは改換す事あり
三と云ふは改換す事あり
軍皆逃還と云ふは改換す事あり
しと云ふは改換す事あり
家國と云ふは改換す事あり

五難祖^{ごなんそ}の國代^{くによ}俗^{ぞく}元日^{げんじつ}より又日^{またひ}まで實^{じつ}土^{つち}と
 除^{のぞ}く^て輦^{らん}に^て珍^{めづ}物^{ぶつ}より石^{いし}と^を取^と取^と
 宝^{たう}と^をゆ^ゆり^りと^をふ^ふこれ^こ古^こ人^{じん}如^{ごと}如^{ごと}と^を喚^わ乃^のさ^さる^る
 を^をあ^ある^るや^やり^りあ^ある^るを^をあ^ある^るを^をあ^ある^るを^をあ^ある^る
 侍^しを^をあ^ある^るを^をあ^ある^るを^をあ^ある^るを^をあ^ある^る

○と夕ゆふ事ことは飯いひを炊くく竈かまは燈あかりを焚くす

○今秋更に^{また}更と^{また}道ハ^{あや}壽命と^{あら}換むるや

月令廣義

立春の正月の節あり大寒の後廿二日斗柄艮に指
し立春の節あり大寒の後廿二日斗柄艮に指

立書ハ正月ノ親の婚あり一年代天運先より
 ちしまる時を逢へばあんで心と改めろの婚と
 可くすべしりるうおまひ日暮盤とすぬ盤
 粥と合し喜餅とくひ桃湯と浴する事か
 中ゆりより月入廣義よりえたり立書ハ
 奇古今集よ費之

神を祀るむとひり名のふやれをたまふ所
 多ふりやせやとらん 同集より系乃辰
 雪のうしろをききふたりうきひをねにやまふ
 あまのうしろやとらんむ 同集より系乃辰

君之志一也求其所以一也
 之志一也求其所以一也
 之志一也求其所以一也
 之志一也求其所以一也
 之志一也求其所以一也

曹松之志

玉樹傳佳所遇未無此意士半是宋魏徐越
 表年春臘去星回改意他月建寅梅記將
 柳父傳思越鄉人

張子林之志

五中同祇自歸後來歲月更無餘
 度看新曆又改舊風賦一年

張子林之志

徘徊東曉冰雲共暮春
 生靈波東風吹水綠春

①志之何人曉解佳人之志
 志之何人曉解佳人之志
 志之何人曉解佳人之志
 志之何人曉解佳人之志
 志之何人曉解佳人之志

ひも多うくして圍あつやと抹しつれおのふ
かえされどもそのおのふすへへ焼くつるまで
なぐしやまに杜絶を又多くしてあつる
あぐ一は地氣乃かえれおるおへへ

○年の始は孝子の破魔弓とく射るは治ま
せむを武と忘れさるさるへへ他むし一を
射れとて正月は内裏ふくろ射る事乃なり
しなり若座天皇は御宇は大同とて正月は
ろといふむしと事古き文を又えり
かほすとれよりけりなり六年乃なり

年おせり人をろと射るし一や又執通考
日本乃部おも毎正月一日は射教す記き
又毬杖うつるあり是を心り眼とてし
しつ後には乃臺の教現るなり

新昭神中板十云十巻深黄帝取密心以
毬之今毬杖是也此例淨土年始用件
國中世々事仍日本國字其例年始折
毬杖云云此事たりなりす且古き文を
又え次附會の記あり
○又おされさるなりわかれあれたるといひて樂

蚤ハル子ハルはハルとつハルきハルくハル松ハルうハルてハルけハルくハルるハルありハル世ハル後ハルのハル答ハル
おハルいハルくハル先ハル世ハルのハル蚊ハルはハルくハルれハルぬハルきハル
なハルひハルるハルるハルりハル秋ハル乃ハルくハルめハル不ハル快ハル降ハルとハルいハルふハル虫ハル來ハル
てハルいハル蚊ハルとハルいハルふハルおハルきハルりハルあハルたハルのハルこハルのハルいハルのハル樂ハル華ハル
みハルなハルどハルとハルいハルふハルかハルらハルあハルてハルおハルきハルとハルつハルけハルりハル
これハルとハル松ハルいハルつハルさハルあハルぶハルまハルのハル落ハルるハル何ハルとハルいハルふハルかハル
まハルれハルやハルいハルれハルはハルくハル蚊ハルとハルおハルきハルあハルつハルりハル人ハルあハルめハル
こハルのハルこハルとハルてハルけハルさハルけハルらハルなりハル
こハルのハルこハルとハルてハルけハルさハルけハルらハルなりハル
○又ハルおハル奇ハル菜ハルとハルいハルふハル事ハル正月ハルはハルあハルりハルむハルりハルとハル
正月ハルはハルあハルりハルむハルりハルとハルいハルふハル事ハルのハル
こハルのハルこハルとハルてハルけハルさハルけハルらハルなりハル
こハルのハルこハルとハルてハルけハルさハルけハルらハルなりハル

男女ハルをハルとハルつハルてハルてハル肉ハル衣ハルをハルとハル衣ハルとハルいハルふハル
てハル中ハルのハルせハルうハルきハルうハルなりハル
中ハルのハルせハルうハルきハルうハルなりハル
持ハル統ハル天ハル皇ハルのハル時ハルはハル漢ハル人ハル踊ハル歌ハルとハル奏ハルせハルりハル
こハルのハル中ハルのハル時ハルはハル漢ハル人ハル踊ハル歌ハルとハル奏ハルせハルりハル
さハル海ハルをハルかハルりハルあハルりハルれハル事ハルとハルいハルふハル海ハル風ハルとハルいハルふハル
事ハルとハルいハルふハルこハルのハル中ハルのハル時ハルはハル漢ハル人ハル踊ハル歌ハルとハル奏ハルせハルりハル
ゆハルりハルなハルりハル臨ハル舞ハル乃ハル舞ハル人ハル美ハル春ハル樂ハルとハル奏ハルせハルりハル
アハルイハル可ハル樂ハル樂ハルとハルいハルふハル今ハルをハル急ハル歌ハル
あハルらハルまハル乃ハル始ハルとハルいハルふハル事ハルとハルいハルふハル事ハルとハルいハルふハル
てハルこハルのハル中ハルのハル時ハルはハル漢ハル人ハル踊ハル歌ハルとハル奏ハルせハルりハル

二日巳日と狗日と云く車方報が長き二月一日
と雜し一二月と狗と一三日と猪と一四日と牛
と一又日と牛と一五日と猪と一六日と人
日と穀とすこの日晴る時は生むる事れもの
け之くう時ハ思ひつと人々をともて天候乃
生他日終ハ地裡ありかろ言をひいて天候
乃大なる運と推するハ縁起とて海とくちま
ゆへに縁よりふ事ありすや杜若
く終元日王人日来る不法時といふハ俗
とかりと天候乃何や方授礼して人相たふ

天候と云くは云り

○今朝卯乃刻は起念時よりて雜糞と云
吟活とのむと暇乃と一又温飯と食
温飯は乃むべ一このお新ま乃まよひのせ
所ある今日明日行てます

○今日改まを馬重初わりこれと云く初と云
又この初とあるハ又弓射初鉄砲打初わり農家

そとと初なり高きふあさひ初と一舟
ハ船重初と云

○世俗と云年朝と云一男よひ水と云る

ありて氣血の結阿波乃三好の家臣松永清直
う姪女と我女乃三好乃妻ありて一子此哉
と所初一ころ本年乃家無氣の盡ありと
まうせくばたてをせとなりて男とてさうい病
とせど或る日御國家よりさうありて後中々
酒食と客をせ碎他して氣よりよみおれず
気血のりや一ま敷とてさへうすす父見せ
これと林をひて

乙日 今物飲食（いんじき）とらふ又昨日の事——元日よ
 子と申すも（いひ）て難（むづ）矣（に）と食——是（こゝ）極（き）内（うち）と

のむ奴^は婢^いを又あがり

五日霜降あり人といは領内乃農人多く亦多
必收獲肉と与ふ一一年の初に終る家
ありけり此より美饌と与ふ一農人は民の
中なりこれ徳福乃功なりて身とや
たふ事なれい早賤ちりともなるふすべ
し是を霜地となすの事を候し此を年々
農功小むくゆきとなり又道路は路人多
そ大車乃急なりと古人も云

六月沐浴

七日人日といふ（ひなまつり）又靈辰ともいふ人方相
 凡靈方（きんぱう）といふくといふや和信よりみまは
 の初まり今日七種の菜粥と穀（こ）一食（い）七種
 菜といふ一尋（い）は

せうなづかみ形（かたち）として併（ひ）乃（の）社（やしろ）とれす
 ちろこれろとて（に）又佛車（ぶつぐるま）とて（に）又佛（ぶつ）の
 六條（ろくじょう）といふけかといふのありすれ（に）又佛（ぶつ）の
 一けかといふ（に）又佛（ぶつ）の
 地あり世人多くハ花とて（に）又佛（ぶつ）の
 中（な）の月（つき）とて（に）又佛（ぶつ）の
 ちろ事（こと）とて（に）又佛（ぶつ）の
 延壽（えんじう）十一年正月七日とて（に）又佛（ぶつ）の

併（ひ）ともいふなり（に）又佛（ぶつ）の
 いとて（に）又佛（ぶつ）の
 るとて（に）又佛（ぶつ）の
 ゐれ日のとて（に）又佛（ぶつ）の

○又比日（ひ）とて（に）又佛（ぶつ）の
 とて（に）又佛（ぶつ）の
 ちろ事（こと）とて（に）又佛（ぶつ）の
 ちろ事（こと）とて（に）又佛（ぶつ）の
 ちろ事（こと）とて（に）又佛（ぶつ）の

○世後（よ）といふとて（に）又佛（ぶつ）の
 まつとて（に）又佛（ぶつ）の
 地（ち）といふとて（に）又佛（ぶつ）の
 地（ち）といふとて（に）又佛（ぶつ）の

とふふ文あり又礼化と書と都ふて書
是とありと見えたり又と書と書と
はる陽乃我なりと見えたりと書と
と書と書と書と書と書と書と書と
ひくや四月七日と書と書と書と書と
書と書と書と書と書と書と書と書と
至強といふこれよりいふよりいふや

通人日寄杜二格遺詩

人日題詩寄草堂遙懷友人思故鄉柳條弄色
石思見梅氣滿枝堪出勝身左書讀無所不心

後百思後千慮今年人日宅思明年人日先
一臥束之二千春生知書劍典風塵地遠
千石愧爾東苑南山人

又中記云乃信よ正月之代子の日移よ
少和といふ詩ありたえりきよ

ふた日を信覺へしと書し乃たうと書は代の
た書に何とひき

書と書と書と書と書と書と書と書と

書と書と書と書と書と書と書と書と

少年と書と書と書と書と書と書と書と

少きくおぬけのきく一海らるる薬効を問ふ事
首おね枝男七無二心為業飲之とゆいなり
イイセカノ事乃ゆりや

八日 佐醫家初は薬師佛は後継と云ふ人今日その
脈どつちて宴と後く又毎月八日薬師佛乃
にカス素膳と食するものありこれ源氏氏に
後よまふいあやまりと薬師佛と醫乃祖非と
ましくおなりなりむし一神農くくやく醫家と後
知つてせし他は醫術と神農くくやく醫家と後
た一あつ後とねだ神農氏くくやく醫家と後

神少くきくしまたれき微服乃家に神農と云ふと
らんものほ多し一醫術と素膳と後くくやく醫家と
醫術と云ふ人なりや 神農くくやく神乃世より
たき命醫術と云ふ一後くくやく神乃世より
家 國代醫乃くくやく神乃世より
家 國代醫乃くくやく神乃世より
つり八日一に素食と云ふ神乃世より
ましくしきくくやく神乃世より
多し神農くくやく神乃世より

すてあ、ハ志程より然りたる至極なる事、
寧ろあつたりとありきれ、事の終るとい
なすてあつたりとありきれ、事の終るとい
少くも士れ風、ありぬき、極よとてい
元風候よりとていひて、なりあり、何れ
日たより、一礼義より、なりあり、何れ
へり

日本歳時記卷之二

正月之下

十四日

十日、門松、燈籠、縄とて、今日、見事、此、歌、は、大なる、縄と
教人、おつと、ひく、あつと、ひく、引る、あり、これと、縄
引と、ひく、あつと、ひく、事なり

梅すり、又、案、内記、の、とく、立春、日、施、釣、之、歌、は、彼、他、
萬、繩、相、貫、綿、巨、敷、里、鳴、教、牽、之、松、之、輪、子、遊、整、
為、載、舟、之、歌、退、別、釣、之、進、則、強、之、名、曰、釣、路、通、
釣、為、歌、起、此、これ、縄、と、お、似、たり、事、なり
○と、歌、薙、薙、ふ、と、曰、判、判、金、の、ろ、く、の、物、也、と

つゝおきやけい火災に受あひ爆作り大なり
回祿おきてるもの近年も多しそればかり
不又ハ宅々々々々々々々々々々々々々々々々
つかは焼も又可なり

爆作とは何と云ふ
ちうと云ふ事あり

我 國は今日爆竹する事完結なりしは
より初より事々々々元日迄
下 爆竹するは正月と称しし事
内紀よりえり又除夜と云ふは
玉 荆公の詩に爆竹声中一岁除と云ふ
よ へは漢の武帝の太初と云ふは

我れわつるまであると事乃始として
 焼のるなり又西月全夜を焼と没くして事
 開えき事より入り天をより西月全夜を焼
 わつるなり焼として仙全利と入るなり
 焼行乃るなり日本乃るなり焼なり
 いはばさうの後漢代明帝の時初て天をより
 なるなり焼なり焼なり焼なり焼なり
 焼なり焼なり焼なり焼なり焼なり
 とたよあるなり焼なり焼なり焼なり
 道士の書焼なり焼なり焼なり焼なり

かみすいんつうはふれふ候とてふふ
くれくせされ奇食とてふ所所
ありく爆杖と教くられ所依の樹と焚
くは逆は縦くや世朱ふのくは他相
氣束教杖爆杖教了又焦氏智業ふ
候は集を引ていふ爆所妖氣と降事
たり鄰人ふ仲變といふのあり
祟とてなされてふ痛と病く
志はりふ瓦石と投く妨とふ
救くこれといふのありふ
いふくはりんちり
中ふわきく深衣れく爆作す
半ふ變るはちと終るて爆作
候ふはこれより妖祟乃事や
あふこの教候とてふ足ふ爆作
降くは其理ありふ
○今新小豆粥と煮て候て
湯の細く枕ふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
とふふふふふふふふふふ

いふくはりんちり
中ふわきく深衣れく爆作す
半ふ變るはちと終るて爆作
候ふはこれより妖祟乃事や
あふこの教候とてふ足ふ爆作
降くは其理ありふ
○今新小豆粥と煮て候て
湯の細く枕ふふふふふふ
ふふふふふふふふふふ
とふふふふふふふふふふ



胡麻子小豆也と云哉武乃人えり又九條の右
おれ記より白類まめあつと粟粟柿さけを
かりしと云せり正月一城粟粥防風粥粟種粥
等と云く人をよふと云くいふ事 千金月
今よてえり

世風記正月十五日小豆粥と云く天狗粥と
りす庭中又粟と云くはくは粥と云く
その粥凝付あふむといふねを煮て
とねと云く六夜をすといふい外續有
記別歌叔の吳苑と云くはくは粥と云く

好まぬ記にて傳ずるはくは粥と云く
一正月十五日膏粥と云くはくは粥と云く
と云くはくは粥と云くはくは粥と云く
糜と云くはくは粥と云くはくは粥と云く
中つと云くはくは粥と云くはくは粥と云く
あつと云くはくは粥と云くはくは粥と云く

○今日祖考妣の靈を祀るは酒と云くはくは粥と云く
と云くはくは粥と云くはくは粥と云く
と云くはくは粥と云くはくは粥と云く
○枕をふといふはくは粥と云くはくは粥と云く

やういふも又兄の所司禁下て人と
あやまひへく伏

○今秋の一年十二夜乃國月れ始なりあま
ん所く人おと骨れ月れ初め一と事うわ
あまの事王まへは清きふくまね月と
そてあうび春月良勝め秋月色好月色
令人懐勝喜月色令人和悦といひ事
趙使解の候結縁よりくりあ載集し上あ
門院無

たれいふよひるけりうまへ秋のこひの

月を月くうきりあま今集したは千里

てりも世ひのうもくはまは秋のあま
月夜ふくもあまのあま

○今夕あま乃交とら中とまね之勢令と授
すし彫金廣義よりくり

十六日國信は日遊樂と事とす

あまの事王まへは清きふくまね月と
そてあうび春月良勝め秋月色好月色
令人懐勝喜月色令人和悦といひ事
趙使解の候結縁よりくりあ載集し上あ
門院無

○又今日あま乃交とら中とまね之勢令と授
すし彫金廣義よりくり

とく主人は一日の暇を乞て家より母兄弟才
親戚は福す

指と多よあ氣彩化小執金吾ハ中乃志の
おしと楚ずり幸と司方友あり唯正月十
又夜初あくあ後者一日楚とゆくらこれ
と放夜といふとゆめじの國をもかれ
車ゆりといふなり

廿日今日女人乃鏡看の祿とてろまじ機ありし
鏡鑑と楚食ふ車ありこれ我にれ鑑乃鑑と
いふといひし事ありなりともしゆめ

たりといふや初祿と初祿と初祿と初祿と
と縁よとさうと縁よといふなり

臨月沐浴

○凡貴家人物ふふふふふふふふふふ
とましくと掃除するなりとありしこれ毎月
毎月と家内室中ありふふ掃除ぬれだ
り月中掃除をふたすして人功とふふ
ふれふふふふふふふふふ毎月毎月
乃は下として文仲と掃除せむとふ
延壽武ふふふふ

苗列卿中史高書命朝回於恒會客於樸
玉江春酒香

あつれども親戚すくなし人あひあひ兄弟を
おもひ親密なるをめぐるる故情のほどを

三月元日より晦日へ至るまで世に小歳徳神と
なり幸なり曆林門等より陰陽入ると用ひ
使ふあつてよりと久あふ衆使の方へ一年の
乃を使の方より若十干乃使より但十干此
間ふと海使より甲酉戌庚壬これよりふと海
使とれて丁巳辛癸こゝより甲の衆使と東

言甲乃方に止酉の衆使と南を酉乃方と
在戌の衆使と中を戌乃方とあり庚の衆使
と西を庚乃方とあり壬の衆使と北を壬乃
方とありふと干此衆使は皆陽使と久あり
そ方にあり又乙乃衆使と西を庚の方と在
丁乃衆使と北を壬の方とあり己は衆使と東
を甲の方とあり辛の衆使と南を酉の方と
あり癸は衆使と中を戌乃方とあり乙丁巳辛
癸を陰干とすあつてのづゝ使より陽は干
よ配令して使となすこゝより己と甲の妻

[illegible]

八七と云ふ人の子なりこれ神明はく
 いふにひびくありはきと云ふはきと云
 へるに云く神と云てとある事なり此より
 ありき今日神月終て日神月神と云り
 なるふ神と云く神神なりと云く神神と
 けりもよりあれどなりと云ふすなりと云
 きたりきぬるけりぬるきと云ふ人
 を習くきせたりと云ふのあやまりと云く人
 ぬく天地神明の事なりと云く神神と云
 へるに云く神神と云く神神と云く神神と云

七八と云ふ人の子なり此神神なり此
 神神と云く神神と云く神神と云く神神と云
 へるに云く神神と云く神神と云く神神と云
 きたりきぬるけりぬるきと云ふ人
 を習くきせたりと云ふのあやまりと云く人
 ぬく天地神明の事なりと云く神神と云
 へるに云く神神と云く神神と云く神神と云

新皇の三子ありて一は庚申と云れは三
 戸依す又太平廣記によくと勅を三后に
 奉る人乃ち中みわきも死せしむるひ
 一庚申の日と云ふに上希に傳ふ
 仙と云ふものも三后と絶てかくれど
 なむと云ふも神仙といふたと感應傳
 といふと乃ち神といふ人乃ち乃ちの
 人乃ち善惡と云ふ考證と庚申の日と
 三后の事のみをいふ天曹乃ち乃ち
 人なりと云ふ事の通事と云ふひと云ふ

おぼくろれ人乃あやしらたをればより一
十二年乃事命とうひひ少き事だ一算
乃食とうむふあよあまそ種ぐさのほーこ
てこれをさけもとありかろ急延此妻に役な
んぞ憐ずるまたんや種吾れあゝへ種を
何り種不吾乃家小へ種殃あるを聖人乃教
あそ叱咤の理きう志るあま玉書となりても
庚申の夜終ちとてちりぬまはるをみえと
まぬふあといふ人よ通とせしめんとむ
おめ玉書となりて種と天ふはせべめる

水^{みづ}ありき^{こころ}なりと云^いふなりやとんや庚
 申^{しん}と云^いふなり義^ぎありあらずは^いね^いね
 ら^らて^て結^{くわ}明^{めい}なりと云^いふ今^{いま}申^{まを}の^ご結^{くわ}これと
 云^いふと^と結^{くわ}合^あと云^いふ^と庚^{こう}申^{しん}と云^いふと^と結^{くわ}と
 わ^わず^ずり^り乃^の上^{うへ}に^にあ^ある^るなり又^{また}云^いふ^と邦^{ほう}
 云^いふ^と庚^{こう}申^{しん}ハ^ハ徳^{とく}田^{でん}大^{だい}邦^{ほう}乃^の引^ひく^と日^ひあ^ある^る
 中^{ちゆう}大^{だい}邦^{ほう}と云^いふ^と一^{いつ}人^{にん}を^を得^{とく}る^るこれ又
 附^つ合^{あひ}の^の儀^ぎあり又^{また}庚^{こう}申^{しん}金^{きん}あり申^{まを}と^と金^{きん}なり
 金^{きん}と^と金^{きん}と^と引^ひく^と日^ひあ^ある^る一^{いつ}日^{にち}あり
 一^{いつ}日^{にち}あり中^{ちゆう}大^{だい}邦^{ほう}と云^いふ^と一^{いつ}人^{にん}を^を得^{とく}る^るこれ又

是又譽にありと約のお刻といふも重し申
 のうとやうに人ふ様は理ある事あり
 是くゆたは流儀よきうは始終妖あり
 るとすさば志く可なりされハ柳子厚云
 と墨文あり是淵頼三教傳あり羅新論柳
 う文に跋とあり又信史既よ庚申ハ今
 及先礼法ありて親氏を以てて此とあり
 浮屠とくう代姫高一方事と知くかくと
 群衆探訪より受う文と則頼う彼よりて傳
 小と又じ飛阿りともいふハ識は笑に堪へり

神野別^ノの^ノ得^ト人^ニ夜^ニ定^メ初^ニ共^ニ舟^ニ康^ニ申^トと^ノ上^ニに^ニ
 と^ノ張^ニ籍^ニの^ノ周^ニ居^ニ代^ニ傳^ニ一^ニ峰^ニ鼓^ニ推^ニ甲^ニ子^ニ不^ニ信^ニ

ちんていしんを
ちんていしんを

中興九年九月とては三月と拘忌年とありて
 正弘九年とて友唐より来ひ是より後波羅志
 小とく佛法は此二月為齋素月不宣年義
 是破信人今京師宣命下外恒初不宣此月
 為差殊是ゆ外友唐不宣之是る初敗文叙何
 正思之甚也とり又御代群臣よりて

[illegible]

世ふ久しと云ふ他えおとすりゆりも終つてつた
 も勘する志有りゆきへ唐造史はる程に
 年中、経略とよその科率小造せし、乃ち
 せむし事と恥し、終つてあつた程これと
 たれも袍帯を解いて葬りてせむし明を
 或年乃四月元日の夜に夢よひり、乃ち鬼
 り、虚耗と稱して玉笛とぬきむけ、一大鬼
 て小鬼とそとてこれと云ふ明を夢にうら
 こせり、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた

終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた
 終つてつた、乃ちと云ふ、終つてつた

中節之徒曰よ時珍のつくし菌類は種也ハ菌類
也といふ又考工記の注は種葉ハ推乃くあり
中力てより菌推の形小似より推ハ菌の形
似れいふと因す俗は種乃一推と執く思と
うづ圖と畫て種種とつく事と好むもの
固く種推の情と他くこれ末第の金出く
思と考ふといふ通あるとありてなりは種
一は

種推れる時珍の種といふ種とす
種推史の種といふは種ありはを思

またまた場人や考く書と種世書方記ふ
一といふなりは種あり

又中節といふ元と大師といふ種也種推の種と
てつたといふ種種とあせざるなりは

すい少く俗人乃家といふなりは種ありは種
小並種推の種推とあくは民屋は種ハかの

種推と種人といふなりは種種とあくは種
種と種といふ種種とあくは種種とあくは

種と種といふ種種とあくは種種とあくは
種と種といふ種種とあくは種種とあくは

何くそひ弱し返りまゐりび程明らるべし
けつろくたふあしとまろく

月柳木と楊柳へー西月と木とゆり上時す
光を射る月をさる枝と切く枝は柳と月
すー又花葉と楊柳をさけ月の布し月令
廣義よりさるーこれるをさるの氣とゆく枝
生花とる花とや花政を書よとく、元徳元年
と枝るいし弦乃後上弦の前すー
八月と枝る八月は陰とさるいし枝とて枝
氣盛なり財木の生る年金く枝葉よりなり

上弦といふ廿三日
下弦といふ

楊柳木を枝とやう楊柳木とれべしとまろく
又いそく元果木とくゆりまろく九月乃中枝後
樹れまろくと枝る繩といふまろくとかきまろく
さるまろく六肥土と入水と浸へー次年正月
ろくーろく楊柳の財土とまろくく枝とて
ちとつとまろくさるーとまろくく枝とて加え
枝面より二三寸たかくさるーとまろくく枝と
くさるーと枝るのろく中月やとく無節水と浸
此月柳乃枝と切て枝は柳とさるーと月令廣
義よりさる元月枝と柳とさるーと月令廣

檜柏 楓園 柏 庭松 海紅 海棠 山茶 石楠
山茶 薔薇 紫梅 梅 櫻 等あり 庭法 紫玉 日
よかー 細糸ー 砂土 等かひー ところひて
よくまへとせす なる地は 志さつとせめて
枝とる年 のぎくようぎ 別のおり きたる
えごあく 先元とさー してゆく くの元とえぎ
乃ち枝とて 買すさー といふ 時とあそり
陰地よりー 或はよあやひとさー 日とむ
あまの 妙なりとく といふ 海とさるす
秋よりて 根生ー たる 時移ー といふー 又
冬より 海とさるさる 木は 月梅 ぬり 時梅 たり

好そ 重なる 来る 四月 月梅 ぬり 時梅 たり
人なる いたさ といふ 時梅 ぬり 時梅 たり
冬より 十年 月梅 ぬり 時梅 たり
とり 次元 木と 梅と 庭と なるー 日と 園
中と 遊んで たり 月梅 ぬり 時梅 たり
貴と 休る たり といふ 月梅 ぬり 時梅 たり
生え 最も 可親 といふ 月梅 ぬり 時梅 たり
無与人 同く といふ 月梅 ぬり 時梅 たり
て 玉地 生え ぬり といふ 月梅 ぬり 時梅 たり

歌
湯
乙
の
権
心
記
情
乙

紅白宜相間。先後仍順。次牙裁。我欲以成。

攝酒去量數一日不用

楊謙齋の三子經乃侍下

三、這初剛是蔣卿要用三、這有剛明。謝奇庵有

三
運一
運花開一
運

趙白雲 載仁杏竹了

白髮ハクセ 袖スリーブ 根ネ 送ソウ 送ソウ 何ナニ 年ネン 及ヨリ 見ミ 子コ 垂タラシ 老ロウ 年ネン 但タリ 秋アキ

添培植不問區花結子時

四月をぬき初よりあるとらるるをぬき

第とくひたひるありま王くまむちるちる

むねれろ袖ひきとり秋乃玉とあふれりかたれ

い事 月令 ツキサツ 乙未 イツミ 子 コ のうき 附 ツケ 本 ホン の文 モン 雲 ウン

金就一時殺曾子乃曰新
一樹殺一縣不其

内うち 忠ちゅう 孝こう 也や 之これ 義ぎ 也や 之これ 本ほん と 之これ 義ぎ 也や

[illegible]

天地乃形者なりと云ふるなり

遠くをゆく雲は月天
地を渡る鳥は空を
渡る

家國密して志氣を泄さずなりと

戊月狸皮とくハ襪とヤウ蓼とくハ脛とカ

生蘊とて人の面より遊風と起る又型とてふ
るなり又響花不付地地と云ふて非病
乃動と遊く

月令廣義
蘇書

凡一年十二候あり又月と一候と一候と一
氣と一候と一月と一十二候と一年とす
四月より十二月まで毎月各六候と云ふと先
四月乃六候中一候風氣始生
二魚上氷右五雲乃三候あり中一候魚上
又臨風小氷云々
凡一日一候候乃動とて而刻を刻ハ漏水の

因より生るなり
長に走るなりて至る乃長短ひくうす
雲かぐさ時を候なり

一ノ一有二十四氣
先立雲ハ五ノ十二刻
十分合百刻あり
又二十四刻十分あり
凡二十四分と一刻と

月令廣義
又云

ちく片^か元奴婢とあるは縁^{ゆかり}のありきもの。按^{おし}て
す又才^{さい}痴^ちのものとあれどもは好^{この}むべきに。然^{しか}し
けで才^{さい}のありきもの。然^{しか}し
るもの。按^{おし}て
令^{しやう}のありきもの。然^{しか}し
乃^{すなは}ち才^{さい}のありきもの。然^{しか}し
之^{これ}もは才^{さい}のありきもの。然^{しか}し
下^げ賤^{けん}のありきもの。然^{しか}し
てん。然^{しか}し
約^{やく}と一年と定^{さだ}めしきもの。然^{しか}し

臈^{らふ}のありきもの。然^{しか}し
拙^{せつ}のありきもの。然^{しか}し

才^{さい}のありきもの。然^{しか}し

八月 秋^{あき}の佛^{ぶつ}の生^うまれあり。佛^{ぶつ}祖^そ統^{とう}記^きは周^{しゅう}代^{だい}昭^{しょう}王^{わう}二十
四年四月八日秋^{あき}の佛^{ぶつ}の生^うまれあり。但^{ただ}周^{しゅう}代^{だい}昭^{しょう}王^{わう}の月^{げつ}とて
四月とされしは月^{げつ}の今^{いま}の二月と通^{とお}なり。漢^{かん}代^{だい}の月^{げつ}とて
事^{こと}と考^{かう}えて夏^{なつ}の四月ともししゆり。何^{なん}れ
にありと古^{ふる}人の説^{せつ}ふにえたり
十五日 提^{だい}要^{よう}録^{ろく}の今日と世^よの今日と
臣^{しん}の説^{せつ}ふにえたり。然^{しか}し
るもの。然^{しか}し
と号^{ごう}して月^{げつ}と貴^きするもの。然^{しか}し
○佛^{ぶつ}の生^うまれあり。然^{しか}し

あられと云ふ又月建と考ゆまけり此は被邪レ傳レ國レ此穆王五年二月十五日佛涅槃すレ記

せり月の二日ハ今代十二月あり云々今十二月

すハありと云く佛涅槃すハあり

十八日孔子乃卒

一終ハ日あり

孔子の生年ハ日終あり

これハ孔子五十四代乃終

二十八日

いは艾老と田所ハ探ハあり云々市ハあり

ふへハ上ハ己乃ハ甚ハ難ハと云ふあり云々未地ハあり云々今

農まもハあり云々

昨日沐浴

甚ハかハ日夜の長ハあり云々一ハ河あり云々新勝ハあり云々

あられと云ふあり云々日ハあり云々二ハあり云々と曉ハあり云々

日ハあり云々二ハあり云々と昏ハあり云々昏ハあり云々中ハあり云々

夜ハあり云々とハあり云々とハあり云々とハあり云々

それハ日あり云々一ハあり云々とハあり云々とハあり云々

冬ハあり云々一ハあり云々とハあり云々とハあり云々

あり云々とハあり云々とハあり云々とハあり云々

まハあり云々日ハあり云々とハあり云々とハあり云々

考ハあり云々とハあり云々とハあり云々とハあり云々

とハあり云々とハあり云々とハあり云々とハあり云々

とハあり云々とハあり云々とハあり云々とハあり云々

一、おのおを精奠さく朝廷より年々二
 び大嘗寮より孔子とあるを終る二月に月乃
 この丁卯の辰に日徳國忌初年のことと
 ありこれ中丁卯あり但大嘗寮より孔子と
 十哲とあるは法蘭西の先聖文宣王先師孔子と
 あり左宰府より先聖先師関子騫をまつり
 延嘉成よりこれ事文武天皇大和元年二
 月よりこれなり
 後日年紀
 後花園院寛
 元年中より精奠の終りなり
 無記の太
 祖の後世終終一とありこれ事あり

万世代師を奉る
 秋奠乃礼式終る式
 江表記より詳あり

春分秋分乃初日より二日ありと作りて
 七日と佛氏名づるを彼岸と云ふ又彼岸乃事言
 を中より名づる又作りて七日の万世
 代師より佛氏佛子佛母又佛法師又佛
 經法後と云ふこれと彼岸を云埃裏なる
 夜神等よりこれと彼岸なる大阿羅漢なる
 又日没の彼岸彼岸と作りてこれと彼岸と

[illegible]

農しやふり百穀とて夏の熟るより
 棄^す継^{つぐ}之を以て穀とて授^{あづか}る共工氏の九州
 覇^はなり時そのみと后土としよす九州と平ぐ成ま
 祀^{まつ}て以て社とすといふ
蓋^{おほ}邑^{むら}のともく乗^{のり}面^{めん}穀^{こく}、楊柳^{ようりゅう}の
 稷^{じき}と百穀^{ひやくこく}ありとあり成^{なり}て授^{あづか}るといふ
 りの社^{しゃ}よりれ社^{しゃ}とち社^{しゃ}あり稷^{じき}の穀^{こく}社^{しゃ}あり土穀^{どこく}
 の社^{しゃ}とありとも人氏^{じんし}と名^なあるすなりなりと方
 々^{さまざま}に秋^{あき}日^ひの村民^{そんみん}たがへも来^{らい}経^{けい}て酒食^{しゅしょく}
酔^{よめ}飽^{ほう}とれどもんえたり張^{ちやう}演^{えん}の社^{しゃ}なり社^{しゃ}ありとも
 祭^{まつり}人^{ひと}帰^{かへ}り他^{ほか}なり又^{また}けられ酒^{さけ}と尊^{うん}と治^ちむ
 成^{なり}て治^ち尊^{うん}酒^{さけ}と名^なつて海^{かい}緑^{りよく}神^{かん}事^{こと}なりとてなりとる

正月法華經根と標、收束、沈着中、管候

酒より飲み出二月に草己に茅一八月に草

良材と云ふ大率根を用ひ和之方根の如く茎葉を

人々を益する事
益は地味にありて
久しくなりし故に

信るを物とすれども苗^{コメ}ち^{タケ}ふく^ノて^ハたけの^ノ内と

今迄も辛くも耐えられずかた恨み

茶と用ひ抱ひ蒸初く此處より所より芽と用ひ

多と用ゐるものゝ実と成すに取らん
 二時月

月は花をさすの深さ乃中をさす如く月は

龍吟之聲松花始盛開
九考何年

今人ハ痼疾と云ふと和子と食するがうれ大森と食
 九人ハ人として氣がさうがうむ小森とくハ人ハ
 志性とわぬの最生冷と食すると思又流塊の流氷
 を飲まうと瘧瘴と食ひ
月令廣義
 二月乃ち候才一枕姑蘇才二倉庚才三鶯化為
 始大森瘧乃三候才四才五才六才七才八才九才
 十才十一才十二才十三才十四才十五才十六才十七才十八才十九才二十才
 廿一才廿二才廿三才廿四才廿五才廿六才廿七才廿八才廿九才三十才
 三十一才
月令廣義
 二月乃ち候才一枕姑蘇才二倉庚才三鶯化為
 始大森瘧乃三候才四才五才六才七才八才九才
 十才十一才十二才十三才十四才十五才十六才十七才十八才十九才二十才
 廿一才廿二才廿三才廿四才廿五才廿六才廿七才廿八才廿九才三十才
 三十一才
月令廣義

三月 驚蟄 蟄を始知と云ふ三月乃ち和名と流氷とハ東海
 にさく風をゆくさうておもふとくおもふ
 三月乃ち和名と流氷とハ東海
 三月乃ち和名と流氷とハ東海

二月 沐浴 艾簾と懸すへ

三日 今日と重くと云ふ又と云ふもよふ初と云ふ也

四月 一乃三月初乃巳の日と云ふと色すす二月を

辰月と云ふハ巳と陰日とす不祥を遠くさうなり

沈約の宋書に魏より以後二月を用く己乃日と

拘り候と云ふなりけり今日艾簾と食し桃花酒と

乃そ艾簾と和殿と云ふなり

今日艾簾と云ふなりけり今日艾簾と食し桃花酒と

卷三

育極米
俵あり

中子

米粉

之鼠

李

乙

三

卷之五

二

周
公
才

五九

味の

彭
二
杜

子

祖

人

五代

抄

附記の

とのむ事月金産教は天まで引ていそく二方枕
花とをくはひひくこれとのめ病と除く花を
をうらひひかん枕花をばは浸さひひかん花を
用てふ花乃花と服され鼻血ひてくやまひ
やまひひかん

○もろくく一六信節は考妣之祖乃神主はあは内食
もろくく花わは世國乃人とかねすのてふ事
たり信節といえりた外上巳節午星々中元節湯
乃節なりこれ世俗の美する内行てよめくられ
時食もろく考妣一宴樂は志る考妣生祖はす

さふはんようろふひ又盛死は事なり事なり
りまゝ亡に転るこね事なりまゝなりまゝなり
やあゆひも時代果蔬もの類也時食は上巳の
草節端午乃粽中元乃蓮葉飯市湯の菊酒
飯の類なり毛と盤よりて盆前には酒一
初は雅楽とともひられ

○のめへは今日曲水乃宴とるはもハ川乃上は通
一被櫻と流水は觴とてうらた杯の酒を
さうはひは酒と能くその杯と酒と受け
ふ事なり酒と能くその杯と酒と受け

二月と己乃日蘭とありて案く石祥と被除とある
訪經大郵局とありて案く小清と注するは
ゆれとるれ始と一と事なり
新嘉坡士樓飲序樓遷
也郵局者之蓋取法
也蘭表也陽氣敷也握芳蘭臨清川乘和蘭用徽介社其意深
矣返文梓善令三月宴序云ハ酒食出于邸曰契飲古俗也
我初ゆと水乃富といふ事
御字より始なりと注するは事なり
乃富の初とあるも人をも中へたりと
徳樂と注し日本三月三日有桃花水宴とあり
新後文と注し定家は水乃富なり
是よりいふも水乃富なりとあり

ありと注しとあり又とありとありとあり

ありとありとありとありとありとありとあり

○又今日難合とありとありとありとありとあり

乃事とありとありとありとありとありとあり

一にありとありとありとありとありとあり

俗語とありとありとありとありとありとあり

明日とありとありとありとありとありとあり

一よりとありとありとありとありとありとあり

今按とありとありとありとありとありとあり

障
奥
深
待
也
...



村
外
月
言
...



今夕さきさきと春ははつる日をまじりて郊外
わらわしふ歩ふ也候して静思と笑し春とど
ろし後探集し九河内躬恒の奇

つれてさきさきと春ははつる日をまじりて郊外
わらわしふ歩ふ也候して静思と笑し春とど
ろし後探集し九河内躬恒の奇
多ふきくさん玉露集に三月先れんと大徳の
取とすうわらわしとてあふふ後とまじりて
とふらうらん又お大徳とて春のまじり
先くくゆとまじりてあふふ後とまじりて
とふらうらん

賈島の三月四日照劉評更詩

三月いさふ二十日風芝別寂苦吟身世居今夜不
須睡未も曉鐘は是春

清明三月
より二日茶乃日とて春食とてい日より一六
先此れ墓所と掃塗して春とて春のゆきとて
これより一六日風俗なりとて春とて春のゆきとて
食と十月朔日展墓とて春とて春のゆきとて
春とて春のゆきとて春とて春のゆきとて

は月親戚及交友と春とて春のゆきとて
て春とて春のゆきとて春とて春のゆきとて

害とむ教一々整集とふひくは又唐書に
て禮と失ふくす又海とやぐちをく人びく
先礼うな唐くは世依親戚男女と客とく不替大
と損ぐ淫樂を強む人情と通く一節宣と志する
政子君ふひ已く一々修くまふく人くすく平政
徳獲樂たくとく可なりと云

三月月天すく日と一々屋宅と家と修く破損
と修造一々或茅屋と葺改板屋と修葺と一
二月治屋室以修葺と回安厩子と記り

は月菜蔬花多き菜はまきと種一々或修く葺葺

初又ハ中初よりえてくくやれはけくくすり
南風蜀黍玉蜀黍芒花烏芋紅豆豆家豆菜豆
豆赤豆刀豆胡麻薑眉豆黍石竹地芝車麻
荊芥香蒿すくは月乃節のくく免く免くす
紅豆々三月の中より初く種とす一々月の家
やうくやうめとくは実のくく久一地す温す
まかようくゆ一々菜蔬とくゆくくく記
くくやれはけくくやうく実のり唐く唐
のゆへあり又その地島の家暖にすりて速く
あり一々又は月本と種一々松橘柑柚香櫨乃影々

孫少卿之教也一王

志之命之延也其家業之命也

龜之命之延也其家業之命也

二月乃右候牙一桐

見太清明之二候也

其時才六載勝降干

清明八至五十二刻十分

至五中四刻十分

日本書紀卷之三



日本書紀卷之三

一 意用舎所
懷中が金一冊 ○はがし
至てあると云用と云はる
有るの意用と云はる
大 成 正 字 通
正 字 通
一 甲 引 正 字 通
正 字 通
一 當 用 虫 丸 大 全
世の動植物の字の
一 医 療 方 規 矩 大 成
一 十 字 文 字 字 通
天明二年甲子 五月
大坂市 板



